# G.

グランシップマガジン
[ジー] vol.32
GRANSHIP magazine
AUTUMN 2006

SPECIAL-1
## マーチング入門
ENJOY! MARCHING

次代を創る顔
ファッションクリエイター　恩田　徹也

しずおかアーティスト・リレー
画家　川合　朋郎

SERIES わが羅針　第32回
## 宝井 馬琴

メセナの「顔」特別対談
静岡鉄道㈱代表取締役会長　川井　祐一　×
グランシップ館長　山本　肇

SPECIAL-2
## ウイリー・ロニス
を知っていますか。

村松友視の文化漫遊 ⑱

グランシップ ペンクラブ
大川　信子（常葉学園大学教授）

ART：YUKUO MURAKAMI

GRANSHIP
静岡県コンベンションアーツセンター

# マーチング入門

# ENJOY! MARCHING

これは音楽か、それともスポーツか。マーチングに出会うたび、同じ疑問が頭をよぎる。マーチングにとって、メロディやリズムは生命線だ。「音楽」がそこにある。けれども、統制された「動き」、胸のすくパフォーマンスもまた、マーチングの生命線である。シンクロナイズドスイミングがれっきとしたオリンピックの一種目であるのなら、これも「スポーツ」。マーチングをミュージカル・スポーツと呼ぶ向きもあるようだが、そうした都合のいい呼称さえはじき飛ばすくらい、マーチングは颯爽と、そして痛快だ。

マーチングとは、吹奏楽の演奏形態のひとつで、座らず、主に隊列を組み動きながら演奏するのが特徴。音楽として耳を楽しませ、動きと色彩によって目を楽しませる芸術だ。

ところでマーチングは、いつ、どこで始まったものだろうか。調べてみると、それは遠く12世紀のトルコにまで遡る。その後、主に軍隊や宗教など実用のシーンにおいて欧米を中心に発展。やがて広く一般に普及したとされるが、ヨーロッパとアメリカとでは、現在のスタイルは趣がやや異なる。

ヨーロッパでは、古くからパレードが中心で、今なおショー的な要素は薄く、伝統的なユニフォーム、楽器編成、フォーメーションを基本としたバンドが多い。一方、アメリカでは、半世紀ほど前からフィールドでも行われるようにもなり、やがて優秀なバンドや指導者の登場とともに急速に発展。ジャズからクラシックまで幅広いジャンルの曲がアレンジされるようになり、マーチング独自の楽器編成を確立。さらにバトントワラーやカラーガードなど、ショーを盛り上げるためのバンドフロントのチームも編成されるなどして、今のスタイルの基盤が築かれたのである。

では、日本におけるマーチング史の1ページは、どのあたりに刻まれているのか――というと、どうやらそれは明治維新の頃、薩摩藩の鼓笛隊に端を発しているらしい。イギリスの軍楽長が隊に軍楽を伝え、ロンドンから楽器一式が到着。それからほどなくして現代の軍楽隊に近い編成ができあがったといわれている。

はいえ、その後、大きな発展もなく、第二次大戦以降の十数年は、軍楽隊の流れを継ぐ自衛隊や警察の音楽隊によるパレードやドリル演奏が見られる程度。日本マーチングの真の目覚めは、アメリカから新しいマーチング・フォーメーションが輸入された1960年代といえるかもしれない。やがてアメリカから指導者が招かれるなどして、学校の吹奏楽部を中心に進化を遂げていくのである。

## 薩摩の鼓笛隊が金色の西洋楽器を手にしたときから、日本のマーチング史は始まった。

### 「演奏場所」いろいろ。

**ストリート・ショー（またはパレード）**
地域の行事などに参加して、主に街頭などで行進演奏するもので、シンプルな行進形態にちょっとしたアレンジ、ステップの変化などを加えたもの。

**フィールド・ショー（またはフィールド・ドリル）**
屋外競技場や広場など、広大な野外での演奏・演技で、さまざまな形を描いたドリルを展開。海外ではポイント（5m毎の目標マーク）のない状態で行われる場合が多い。

**ステージ・ショー（またはステージ・ドリル）**
コンサートホールなどのステージで、曲に合わせていろいろな形を描くドリルを展開する。

**フロア・ショー（またはフロア・ドリル）**
体育館や屋内競技場などの床30m四方を使ったマーチング。この形式は日本のバンド編成規模から生まれたもので、日本独特のものといえる。

### マーチング、2つの「スタイル」

マーチングのスタイルには、「カレッジ・スタイル」と「コー・スタイル」があり、日本では最近、この2つを融合したスタイルが多くなりつつある。

**カレッジ・スタイル**
個人演技を中心にショーアップを図るスタイルで、大学を中心に発展したのでこう呼ばれる。ショー的な要素が多い。

**コー・スタイル**
世界大戦終結後も続くアメリカ国内の風紀の乱れから子どもたちを守ることを目的に、州や公共団体などで設立されたもので、ドリル的な動きを主体としたミリタリー・スタイルをとる。

# これが マーチングだ。

## That's Marching!

楽器演奏だけでなく、カラーガードなどの演技を含むことも多いが、一般的なマーチングバンドの編成には、次のようなものがある。

### ドラム&ビューグルコー

マーチング独自の編成で、ビューグルと呼ばれるG調の金管楽器（信号ラッパ）と打楽器群で編成される。最近はビューグルに限定せず、マーチングブラスと呼ばれる楽器の使用も認められるようになっている。

### ファンファーレバンド

金管楽器、サクソフォンと打楽器で編成。

### ドラムコー

マーチング独自の編成で、打楽器群からなる。あるいはドラム&ビューグルコーの略称。

### 吹奏楽／ウィンドバンド

一般的な吹奏楽団、あるいはそれに似た編成。現在、ドラム&ビューグルコーと同様の打楽器群が用いられることが多い。

### 鼓笛隊

主にドラムなどの打楽器とリコーダーや鍵盤ハーモニカなどで編成。

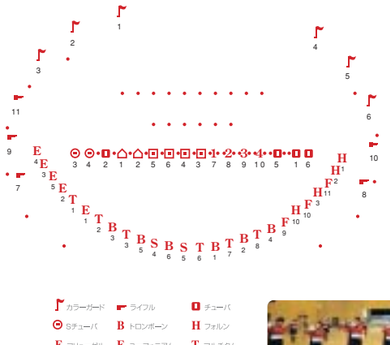
### ブラスバンド

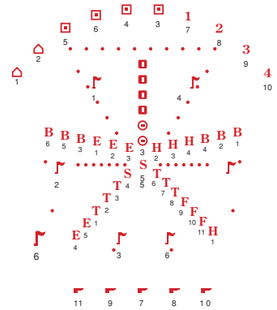
金管楽器と打楽器による編成。金管バンドとも呼ばれる。小学校などでは英国式ブラスバンド、あるいはこれに近い編成の金管バンドでマーチング活動を行うことも多い。

### 軍楽隊（ミリタリーバンド）

陸軍・海軍・空軍などの軍隊に属している楽隊をいい、通常は木管楽器、金管楽器、打楽器で編成。

## 「楽器編成」に注目！





## マーチングならではの「楽器」たち

取材・撮影協力　綜合警備女子儀仗隊（ALSOK VIVACE）

女子社員によるマーチングバンドとして1985年発足。「強く、正しく、温かく、そして感謝の気持ちを忘れずに」をモットーに活動中。1986年8月の尼崎フェスティバル開会式にて対外デビュー。その後、全国各地の式典や祭典などでパレードやドリル演奏を披露し、イベントを盛り上げている。

### スーザフォン

Bb管のチューバと同じ管長を持つ低音金管楽器で、かつてはその親しみのあるフォルムからマーチングバンドを代表する楽器だった。

### ビューグル（G調）

バルブを持たない信号ラッパから発展した金管楽器で、アメリカでは、伝統的な信号ラッパがG調であったことから、ほぼG調に統一。現在のビューグルは、通常のトランペット同様、3つか4つのピストンを持ち、ソプラノ、アルト、バリトン、コントラバスに大別される。なお、アルトはアルト（フリューゲル）、メロフォン、フレンチホルンの3タイプ、バリトンにはバリトンとユーフォニアムの2タイプがある。音響に難のある屋外でも最大の効果が得られるよう、フロントベル（ベルが前を向いていること）になっていて、輝かしい音色を発する。

### マーチングブラス（Bb調・F調）

日本の吹奏楽編成のマーチングバンドでは、金管のみの編成であっても、ビューグルではなく、このBb管・F管のマーチングブラスを使用することが多い。ソプラノにはトランペット（Bb管）、アルトにはマーチングメロフォン（F管）、バリトンにはマーチングバリトン（Bb管）とマーチングユーフォニアム（Bb管）、コントラバスにはマーチングチューバ（Bb管・Es管）で対応。さらに厚みのある音をつくるため、マーチングフレンチホルン（Bb管）やフリューゲルホルン（Bb管）を加える場合もある。

### マーチンググロッケン

本来、小型の鍵盤楽器であったことから、そのままキャリングホルダーをつけて使用。

### マーチングシロフォン

軽量化のため、音域は2.5オクターブと狭く、鍵盤もコンサート用シロフォンより小さい。

### マルチタム

一般にトリオ、クォードドラム、クインドドラム、テナードラムなど、タムの数で呼ばれる。高音と独特の倍音が特徴。

### マーチングバスドラム

曲のベースラインを担当し、通常3～5人の奏者が大きさの異なるバスドラムを演奏。よく用いられるシェルのサイズは16インチ～26インチ。

### マーチングスネアドラム

通常のスネアドラム（コンサートスネアドラム）にくらべて強固なつくりで、高めのチューニングが可能。高音と独特の倍音が特徴。

## マーチングの「パート」

### カラーガード

音楽に合わせて身体で表現するセクション。フラッグ（旗）などの手具を使って演奏を華やかにするパート。

### パーカッション

リズムをつくるセクション。鍵盤やティンパニーなど、大きな楽器を決まった場所にセットする、唯一動かないパート「フロントピット」と、スネア、テナー、ベースという主に3つの打楽器で構成される「ドラム（バッテリー）」の2つのパートからなる。

### ブラス／ウィンド／ホーンズ

管楽器（金管楽器、木管楽器）のパートで、メロディを奏でるセクション。吹奏楽と同じ編成で行われることが多いが、金管楽器だけで構成する場合もある。

### ドラムメジャー

指揮者のこと。メジャーバトンとホイッスルを用いてさまざまな隊形変化の合図を促す、指揮者。バンドによっては、華麗なメジャーバトンなどの見せ場もアリ。

# 「パフォーマーには”揃う“快感があり、観る人は見ているだけで単純に楽しめる。それがマーチングの魅力なんです。」

**田中 久仁明**（たなか くにあき）
マーチング指導者。日本マーチングバンド・バトントワーリング協会副理事長・上級考査員、日本マーチングバンド指導者協会公認指導員・本部検定員、ALSOKビバーチェ演出総責任者。1990年～91年放送の「DOマーチング」（衛星第2）ではレギュラー出演するなど多方面で活躍。

日本マーチングバンド・バトントワーリング協会の副理事長を務める田中久仁明氏は、現在、国体やインターハイをはじめ、さまざまな式典・祭典でマーチングを手がけるトップ指導者。そんな氏にマーチングの魅力についてうかがった。

「マーチングの魅力は、何といってもチームとして”揃う“という快感でしょう。そして、あるレベルの技術を持った者でなければできないカタチが美しく描かれたとき、その楽しさを全身で感じることができるということ。しかもそれが見ている人にそのまま伝わるわけです。たとえばクラシック音楽などでいい演奏かどうか判断するには、それなりの力が必要ですが、マーチングは観る側に何一つ知識がなくても、キレイ、素晴らしいと思ってもらえる。そこのところがやりがいにつながっていくんですね」

みんなで一つの絵を描く楽しさがそこにある。しかも自分たちが奏でる音も大事な表現要素だ。

「日本のマーチングバンドは、学校団体の吹奏楽を母体としているところが多いのですが、いわゆる座奏の吹奏楽とは違って、マーチングは動きながらの演奏ですから、集中力も体力もかなり必要です。しかし、それよりも今、課題とされているのが練習環境なんです。グラウンドには他のクラブも活動していますし、日本ではそもそも外で音を出すということ自体が難しい。かといって音楽室では、フォーメーションが描けませんから」

大会などでは、30メートル四方を使った演技が要求されるマーチング。グランシップの大ホール・海は、そのスペースが十分にとれる上に、マーチングを芸術として楽しめる設備であると氏は語る。

「我々は通常アウトドアか、インドアであっても体育館のようなところで行うことがほとんどで、照明もスポーツを観戦するためのものでしかないんですね。その点、グランシップは舞台として概念から、演技をより効果的に”魅せる“演出としての照明がある。マーチングを一つの音楽芸術、一つのショウとして成立させることができる。これは大きいですね。しかも普通は楽器を出し、セッティングするところから観客に見られているわけですが、グランシップではそこを見せなくてすみます。昨年に引き続いて来年も行われる『マーチングバンドフェスタ』にはいろんな団体が登場しますが、つなぎがスマートなため、お客さんも全体を一時間半のショウとして楽しめるんです。こうした場が全国各地でできるようになればうれしいですね」

注目のマーチングバンドがグランシップに続々集結。
グランシップの大空間に描かれる、ダイナミックなパフォーミング・アートを楽しもう。

## マーチングバンドフェスタ
Marching Band Festa

**2007年1/28(日)**

11/26(日) チケット発売

**14:30 開場　15:00 開演**

**グランシップ 大ホール・海**

出　演
綜合警備女子儀仗隊（ALSOK VIVACE）ほか

# ウイリー・ロニスを知っていますか。

Willy Ronis

ホンダメンタ・ヌォーヴェ 1959

「戸外は舞台、偶然という名の演出がある。偶然は時折、天才だ」——ウイリー・ロニス

昨年から今年にかけて、パリの市庁舎前にはしばしば列をなす人々の姿が見られた。当局は、予想以上の来訪者に、やがてある展覧会の会期の3か月延長を発表する。それは芸術の都といえども異例のことだ。

**「私がシャッターを押したフィルムからプリントした写真の数を比べると、その比率は僅かである。それでも私の目には少なくとも私の存在が証明できる」**——ウイリー・ロニス

その展覧会とはほかでもない。ウイリー・ロニス95歳を記念して開かれた写真展「ウイリー・ロニス展」だった。残念ながら、日本ではまだ彼の名はそれほど有名ではないが、ここ10年ほどの間に、彼の作品の値段は10倍近くに上がり、とくに数年来、ロニスは写真界や地元パリを中心に"注目の人"だ。

＊

ウイリー・ロニスは、パリの歓楽街近く、写真機材店の集まる9区で生まれた。子どもの頃から絵画と音楽が好きだったが、写真の修正師だった父が亡くなり、店が人手に渡ると、フォトリポーターとして生きる決心をする。

ロバート・キャパと親しく、戦後はいくつかのグラフ誌にパリのルポルタージュ写真を提供。また、フォト・エージェンシーのラフォ（Rapho）に所属して、広告、ファッションの分野で活躍。数々の賞を獲得するなど、彼にとって50年代はある意味、黄金期だった。

しかし、若い写真家に活躍の場を奪われはじめた60年代以降、彼の名は次第に聞かれなくなる。南仏に住まいを移し、10年間ほどは写真を教えるなどして生活。しかし、アルル国際写真フェスティバルに招かれたあたりから、再び彼は陽の当たる場所へと導かれていく。そこであらためて自分の居場所を確認したのだろう。やがて彼はパリに戻り、生まれ、愛した街の日常を再度撮り続けるようになるのである。

＊

ブレッソンやドアノーら、同世代の写真家に比べると、ロニスはすすんで前に出ていくタイプの写真家ではなかったように思われる。両親がユダヤ人であることから、ずいぶん辛い経験をしたようで、若い頃から貧しい人々に共感し、コミュニズムに傾倒した。だからといって、彼の作品に悲惨な光景はあまりない。

「私の作品を見たらパリは天

**ウイリー・ロニス** WILLY RONIS

| | |
|---|---|
| 1910 | 写真修正師の父とピアノ教師の母のもと、パリに生まれる。 |
| 1932 | 家の事情で音楽家になる夢を断念し、写真館を引き継ぐ。 |
| 1936 | デヴィッド・シーモアに出会う。 |
| 1937 | ロバート・キャパとの親交が深まる。 |
| 1947 | コダック賞受賞。 |
| 1957 | ヴェニス・ビエンナーレで金賞受賞。 |
| 1972 | アヴィニョンの芸大、プロヴァンス大学文学部、及び科学部の講師となり、約10年近く写真教育に専念する。 |
| 1979 | フランス芸術文化大賞を受賞。 |
| 1980 | アルル国際写真フェスティバルの名誉招待作家になる。 |
| 1981 | 写真集"偶然の糸を手繰って"にナダール賞が授けられる。 |
| 1985 | フランス国立写真センター美術館パレ・ド・トーキョーにて回顧展が開かれ、国への作品及びフィルムの寄贈を正式に発表する。 |
| 1989 | レジョン・ドヌール勲章受勲。 |
| 1990-93 | エージェント"RAPHO"と国立文化遺産館による企画展がフランス各地及び海外巡回される。<br>英国王立写真協会のメンバーに任命される。 |
| 1995 | 文化功労受勲者となる。 |
| 1998 | 英国ワーウィック大学の名誉博士となる。 |
| 2000 | アルル国際写真フェスティバルでフィルム"ウイリーの90歳"が上映される。<br>何必館にて「ウイリー・ロニス展」開催。 |
| 2005 | ロニス95歳を記念してパリ市庁舎にて「ウイリー・ロニス写真展」が開催される。 |

WILLY RONIS

国かと誤解するかもしれない」——彼自身、そう語る通り、平和な日常がそこにあるだけだ。しかし、コントラストの利いた画面構成などから、その日を生きる人々の確かな生命感をはっきり感じとることができる。そして、それも"ロニス"なのだ。

きわめて地道で几帳面な生き方ゆえ、正しく評価されるまでに4分の3世紀という時間が必要だったともいえるが、今はそれも得て、周囲の騒ぎをよそに彼はパリの自宅で静かな生活を送っているという。

彼がカメラを置いたのは、足を患い、気ままに出掛けることが難しくなった2001年。90歳のことである。

「写真は完結された芸術のごとく、ある表現の中で明らかに示されることができるから素晴らしい。このことを大胆に、強く言わなければならない。」

## パリの大成功を受けて、この秋、グランシップに。
## 寡黙な表現者、約100点を一堂にかく語りき。

この秋の写真展は何ですか——そうした声が聞かれるようになった。

グランシップでは、写真、とりわけフォト・ジャーナリズムという視点から、折にふれて写真展を開催しているが、とくに〈何必館・京都現代美術館〉の協力を得て2年前にスタートした「世界写真家シリーズ」には、心待ちにするファンも多い。

第1回が"決定的瞬間"の言葉とともに知られ、開催のわずか数か月前に逝去したアンリ・カルティエ＝ブレッソン。昨年の第2回は署名入りオリジナル写真が高値で競り落とされたばかりの渦中の人ロベール・ドアノーだった。なぜかいつも話題の年の開催で、3回目となるウイリー・ロニスも例外ではなく、パリの大成功によってかつてないほど"ロニス熱"高まるタイミングでの開催となった。

さて、本シリーズに登場の3人は、いずれもパリのヒューマン派といわれる写真家たちだが、それぞ

「カメラは道具、道具は考えない。この道具の背後には私の目があり頭脳がある。シャッターを押す時、この頭脳が選択する。写真家の行為は心の中のことである。客観性はない。」

捕虜の生還、パリ 1945

セーブル・バビロン交差点、パリ 1948

レアール市場の終了時、パリ 1938

バスティーユの恋人 1957

バスティーユ広場で撮影した恋人たちの写真は、しばしばドアノーによる「パリ市庁舎前のキス」と比較される。作風の違いはともかく、興味深いのは、ドアノーの被写体カップルがその後肖像権で裁判を起こしているのに対し、ロニスは撮影から30年後、偶然の再会によって写真のカップルと友達になったことである。

模型飛行機製作、ヴァンサン、ゴルド 1952

「写真家はときめきを持って美しい恋人を待っているようだ。時には彼女が来ないかもしれないとか、笑顔で来るのは待っている彼女ではないかもしれないとか…」

れを個展という形で初めて日本に紹介した何必館・京都現代美術館館長の梶川芳友氏は、こんなエピソードで三者三様の生き方、暮らしぶりを紹介してくれた。

「僕は三人にそれぞれ会っているわけですが、ブレッソンは自宅で食事をご馳走してくれました。ドアノーとはヴァンドーム広場のレストランで食事をし、ロニスとはベルヴィルという職人街の小さな食堂で定食メニューを食べました」

ロニスを称して"市井の人"という梶川氏は、彼について「非常に真摯で、知性に溢れ、温かい思いやりと誠実さに満ちている」と語り、さらに図録の中でこう記している。

「私は、人間は『自由』を実力にしてこそ生きてゆける、と存知している人に出会ったように思う。（中略）彼の作品には、パリ市民であるロニスの、最も身体化された『パリの自由』が写りこんでいる。そして真の人間性によって静かに流れ、長い時間を経て沁み出すように感じられてくる何かがある」

本展では、厳選された何必館コレクションのオリジナルプリント約100点を展示。パリの市井にひっそりと身を隠す表現者ロニスの真摯な視線は、あなたに何を語るだろうか。

雨の日のヴァンドーム広場、パリ 1946

ロニスは父の影響で絵画が好きだった。ときどきルーブル美術館を訪れ、ブリューゲルやレンブラントなどから日常風景の捉え方や光の構図を学んだという。ロニスの作品には逆光の景色が多く登場するが、そうしたコントラストは、若い頃、絵画から吸収したものが反映されているのかもしれない。


何必館・京都現代美術館所蔵　世界写真家シリーズⅢ

WILLY RONIS

パリの自由、ロニスの百景

**ウイリー・ロニス展**

**11/18(sat)〜12/5(tue)**

**10:00〜18:00**（最終入場17:30まで）

**グランシップ6階 展示ギャラリー**

チケット発売中

**一般 600円**（当日 800円）**学生 300円**（当日 500円）

※小学生以下と70才以上の方、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方無料

主催／財団法人静岡県文化財団、何必館・京都現代美術館　後援／静岡県、朝日新聞静岡総局、静岡日仏協会


GRANSHIP Pen Club

# 『文楽 〜「曽根崎心中」に寄せて〜』


大川　信子（グランシップペンクラブ会員・常葉学園大学教授）


文楽とは面倒な芸能だ。歌舞伎なら、役者が登場人物に成りきり、身体を動かし台詞も喋る。それを文楽では、一体の人形を、大の男が三人で動かす。発端部は黒頭巾を被っているが、場面によっては顔を出して遣う。三人もいるのだから、台詞を担当してもよさそうだが、それは語り手に委ねる。語り手は、登場人物から状況説明まですべてを引き受ける。音響はほとんど三味線一挺で行う。このアンバランスと皺寄せ、何と面倒な芸能なのかと思う。

けれども観ているうちに、遣い手の姿は視界から消え、人形が一人で動き始める。いや、主な遣い手の動きが人形の動きと同化して気にならなくなると言う方がよいか。語り手の大夫の声は、いつしか、お初・徳兵衛を自在に行き来し、何の違和感もない。言葉は、人形が発しているように錯覚される。表情も豊かだ。「ひとがた」に命が吹き込まれる。だから意味のわかりにくい古語の連なりであっても、その「人」の動き方や雰囲気で、おぼろげだが内容が理解され感情が伝わってくる。太棹三味線の撥さばきに負うところも大きい。

例えば『曽根崎心中』では、三百年の時を経て多少の改変があっても、男の生き様と、それを全うさせたいと願う女の強さが、客席に届く。それが真っ直ぐに伝わるのは何故か。語り手を始め、複数の男達が個を越えて作り出す文楽という「面倒な芸能」だからだと思う。「面倒」が、物語世界に生きるものの真髄を、舞台に浮かび上がらせる。

十月十四日、グランシップに文楽が来る。お初と徳兵衛の恋の物語が始まる。

# メセナの「顔」特別対談 vol.2

企業や個人が文化・芸術活動を支援する、いわゆる「メセナ」が日本に定着して久しい。とくに近年は「企業メセナ」「地域メセナ」として、企業活動や地域活動の一つとしてメセナ活動に取り組む事例も顕著である。

さて、今回は文化事業の中でもとりわけ音楽に造詣が深く、企業活動の中で、あるいは私人として文化支援に深く携わる川井祐一氏が登場。地域文化の育て方、理想のあり方などについてうかがった。

「ある一定のラインまで経費として認められれば、企業はもっとメセナに力を入れると思います」（川井）

川井 祐一
静岡鉄道株式会社
代表取締役会長

山本 肇
グランシップ館長

「メセナという言葉が定着したとはいえ、やはり景気不景気には左右されがちですね」（山本）

**天領の静岡になかった民謡。そうして生まれた「ちゃっきり節」。**

**山本**：静岡鉄道さんと文化との関わりということで、私がまず思い出すのが「ちゃっきり節」です。北原白秋さんをわざわざ招いて作曲してもらったという…。

**川井**：昭和2年ですね。

**山本**：その招き方というのも半端ではなくて、彼を静岡に逗留させて。その中で彼が芸者から聞いた「きゃあるが啼くんで雨ずらよ」という言葉から曲が生まれたというのですから。静岡鉄道さんは、昔から凄いことをなさっていたと思います。

**川井**：昔、うちの会社は、狐ケ崎で翠紅園という割烹旅館をやっていたんです。当時はお茶商人の方がよく利用されていて、あるとき、そういう方たちが静岡に民謡はあるかと訊いたんですね。それで芸者は困ったらしい。民謡というのはそもそもが悲しい歌でしょう。ところが静岡は天領で、殿様の悪口を言うのはご法度。だから、民謡がなかったんですね。それで民謡はないと答えると、なんだ、つまらんと。それを聞いた当時の遊園部長の発案でならば作ろうとい

**静岡鉄道株式会社の活動プロフィール**

- ●グランシップ主催・静鉄特別協賛コンサート
  「グランシップ名曲サロン」（2004.3.21）
  「新世界交響曲」（2005.2.11）
  「羽田健太郎の素晴らしき世界」（2006.2.26）
  「青島広志のおしゃべりクラシック」（2007.3.4）
- ●劇団四季静岡公演のスポンサード
  ミュージカル「異国の丘」
  （静岡市民文化会館／2006.10.11～15）
- ●アマチュア野球への支援
- ●しずてつスカウト（ボーイスカウト）活動　ほか

**■静岡鉄道株式会社**

グループ会社30社を有し、大正8年創業以来の歴史を持つ鉄道事業をはじめ、交通、不動産、流通、建設、レジャー、情報など、地域に根ざした事業を展開している。

うことになり、北原白秋先生に頼んだわけです。作曲は中山晋平先生にお願いするつもりだったのですが、都合がつかなくて中山先生の推薦で新進の町田嘉章さんにやっていただき、結果、とても新しい民謡ができた。ただ、ヒットしたのは4年後で、市丸さんが歌ってからなんです。やっぱり美人にはかなわないということでしょうか。（笑）「ちゃっきり節」も、狐ケ崎に造った野球場も、当時のいわば沿線開発行事の一つだったんですが。

**山本**：こうしてみると、鉄道という事業は、文化と縁が深い事業であるといえますね。

**川井**：私鉄の中でそれが最も際立っているのは阪急でしょう。宝塚という一つの文化を遺しましたから。

**山本**：静岡鉄道さんの場合も、長らく静岡の文化に深く関わってこられていますが。

**川井**：それほどでもありませんが、音楽会は、昭和61年から、創立70周年の記念の音楽会を含めて、これまで22回開催してまいりました。

**山本**：会長ご自身は、ＡＯＩの立ち上げの際には委員をなさってましたね。

**川井**：ご一緒した大久保（満男）先生は、私よりも高等な音楽ファンで、こけら落としにヨーヨー・マを連れてこようとおっしゃったんですが、1ステージ2千万ではムリだとわかって、それで声明になったんです。あれはお金がかからない。（笑）

**山本**：しかし、かなり評判になりました。

**川井**：仏教文化の一つであるとともに、日本のコーラスの原点ですね。あのとき初めて観た方も多かったと思います。

## 県の単位で考えれば、誇っていい静岡の文化水準。

**山本**：バブルがはじけて不況の頃は、一旦メセナも沈滞しましたが、最近また活発になってきた感じがします。メセナという言葉が定着したとはいえ、やはり景気不景気に左右されがちなところがあるんですね。

**川井**：企業の側からいうと、税の問題があるわけですよ。ある一定のラインまで経費として認めていただければ、企業はもっとメセナに力を入れると思います。とくに若い芸術家を育てるということに関してね。

**山本**：川井さんの目からご覧になって、静岡の文化の現状はどのように映ってらっしゃいますか。

**川井**：県という単位で考えたら、決して遅れている方ではないと思いますよ。むしろ誇っていい。演劇の方では、鈴木忠志さんも頑張っておられますし。

**山本**：鈴木さんがこの10年ぐらいやってこられたことによって、演劇を見る目も変わった。

**川井**：そうですよ。ああいう舞台背景のない演劇はヨーロッパの主流ですからね。アメリカのブロードウェイがすべてではない。

**山本**：静岡市は、劇団四季に随分熱心のようですが。

**川井**：劇場をつくろうという話まであります。ＪＲさんも輸送力増強を図っておられますし。ああいうものを観た帰りでない限り、夜乗る人は確かにあまりいません。

**山本**：なるほど。輸送力の面から見るわけですね。

**川井**：プロ野球はちゃんとした時間に終わらないけれども、演劇は終わりますでしょう。静岡までなら東京から観に来れる。音楽会もアンコールを一曲くらい我慢すればなんとかなる。浜松まではちょっとムリですけどね。

**山本**：浜松はアクトシティもあり、オペラなど一流のものをやっていますね。

**川井**：アマチュアのオーケストラは、浜松、静岡のほかに、清水にもできたようですね。群雄割拠するのもいいけれど、たまには一緒にやったらいいと思いますよ。山本さんが声をかけてくだされば、実現するんじゃないですか。

## 急行が停まる街に一つずつオーケストラができるようでなくては。

**山本**：一方、プロのオーケストラについても、静岡交響楽団をさらに脱皮させた、県のオーケストラがほしいという声があるようですね。

**川井**：それはそうですよ。静フィル（静岡フィルハーモニー管弦楽団）の前音楽監督の石丸先生がおっしゃってました。急行が停まる街に一つずつオーケストラができるようでなくては日本はあかんと。アメリカの都市の格というのは、プロ野球とアメリカンフットボールとオーケストラ、それから美術館・博物館で決まるんですね。野球が強いところには、必ずいいオーケストラがある。シカゴも、フィラデルフィアもそうですね。アメリカは移民の国ですから文化を誇示する。だから野球も負けられない。

**山本**：それがフランチャイズ制ですね。地域が自分たちの球団、オーケストラを誇りにしている。日本ではサッカーがそういうやり方をして、ようやく地域が支えるクラブチームが育ち始めていますが、オーケストラもそうなってほしい。

**川井**：そういう意味でも、地域が応援したものを企業が支援するものについては、せめて地方税は免除してもらわないと。私どもでは、電車・バスあわせて一日20万人近いお客さんを運んでいますから、地域の方のために何かできればこんなにうれしいことはないんですね。

**山本**：では、これからも静岡の文化の発展のためにぜひご尽力いただければと。

**川井**：私どもでできることがあれば、喜んでお手伝いさせていただきましょう。

# 宝井馬琴

## いい嘘、いい話。

「講談は芸能ですから、事実をしゃべるわけじゃない。ただ、これまでは"見てきたような嘘をつき"だったけれど、今は自分の足で調べ、"見てきたうえで嘘をつき"。同じ嘘でも真に迫った嘘がつける。リアリティのあるいい話ができるというわけです」

### 年齢とともに光を放つもの。

駿河の人は努力家だけど、パイオニア精神がないね――そう語る駿河生まれの師匠は、まさに下駄の前歯が欠けんばかりの勢いで、講談の新しい境地をカッカッと積極的に拓いてきた活動家だ。本誌取材にあたっても、四字熟語と七五調の講談よろしく、戦国の世と現世を結びながら、聞く者を逸らさぬ立て板に水の話しぶり。これぞ日本を代表する話芸。話し言葉としての日本語の魅力に、残暑以上に圧倒された夏の午後だった。

――師匠にとって講談との出会いはどのようなものだったのですか。

「目覚めたのは、清水東高校三年生のとき

でね。東京から疎開に来て、そのまま清水に居着いちゃったのが二人いて、これがなかなかモダンなイケメンだったんだけど、そいつらが文化祭で漫才をやることになりましてね。ただ、二人では時間が余るから、私も何かをということで、それで慌てて谷島屋書店で落語の本を買って、『もと犬』というのをやったんですよ。ところがゼンゼン笑わない。犬がワンワン吠えるところだけワーッときて、ほかはクスリとも笑わないんだよね。笑い八年泣き三年というくらい、笑わせるのが大変なことは今ならわかる。でも、あのときはこんなに面白いことを言って、なんで笑わないんだろうと、正直、絶望の淵に立ちましたねぇ。幸い薩埵峠から飛び込むまではいかなかったけれども。(笑)とにかくその日、そんな気持ちのまま家に帰って、風呂焚きの手伝いをしていたんです。そこへたまたまラジオから流れてきたのが、忘れもしない、うちの師匠、五代目馬琴の『勝海舟』。よく俗な言葉で、背中に電流がビビッと走るなんていうじゃないですか。まさにあれです。独特のリズム感、口調、格調の高さにハッと思った。自分にはさっきの落語ではなく、こっちだと。それからは宗旨替えというんじゃないけれど、講談一直線。まだ民放がない時代で、落語、浪曲、講談がほぼ毎日のようにNHKから流れていましたから、徳川夢声の『宮本武蔵』とか、広沢虎造の『清水次郎長』なんかを夢中で聞いていましたね」

――その当時、講談の道を志す方は多かったのですか。

「いやいや。私が入門して五年間は誰も入ってこなくて、自分が最後の講談師になるんじゃないのかなと思ったぐらい。十五代将軍慶喜になるのかと思った。(笑)参考までに言うと、現在、落語家が東西で五百人ぐらい、僕らは百人ぐらいだから、落語がアフリカのマウンテンゴリラの数だとすると、講談はイリオモテヤマネコだね。(笑)トキにならないようにとは思ってはいますけれどね。私の場合、大学の学生寮の近くにたまたま五代目馬琴のお宅がありまして、最初は一ファンとしてうかがって、そのうち稽古に通うようになったんだけれども、大学時代のあるとき、テレビ番組で素人寄席がありましてね。審査員に一龍斎貞山(いちりゅうさいていざん)という人がいて、〝講談で鐘をカンカン鳴らせる奴がいねぇから、ちょっと馬琴くんのところの学生さんを出せよ〟という話になった。うちの師匠も〝学生なら素人ということでいいだろう〟ということでこの私が出たんだけど、鐘がカンカン鳴るのは、まあ、当たり前なんだな。なにしろ前日に審査員のお宅に稽古に行ってるんだから(笑)。とはいえ、そういうこともあったりして、以来この道です」

――講談では、どのような稽古をされるのですか。

「最初はまず喉をいじめて、声を力強く、大きく、講談らしい声にすることから始めます。いうなればデッサンだね。それが〈読本巻の一〉。相撲でいうところの四股と鉄砲と摺り足と同じ。この中には「序」「破」「急」のすべてが入っている。苦しいけど、これがあらゆる話芸の基本ですよ。それで硬派なネタから少しずつやっていくわけです。講談には台本はあるけど、耳学問というくらいだから、聞いて覚えるのが基本でね。聞き六しゃべり四が上手くなるコツといわれています。もちろん稽古にこれでいいというのはなくて、七十歳の今でもやりますよ。私はジャイアンツの王選手が大好きなんだけど、王選手でさえ休むのがコワイというんだよね。長嶋さんは三日休んでも三日前と同じようにバットが振れる。でも、王さんはそうじゃない。だから、夜中でもバットを振る。休むのに勇気が要るって言うんですよ。私も同じで、今日やらなかったなと思うと、たとえ夜中でも、わずか三分でもやりますよ」

――同じ話芸の中でも、落語や浪曲とは違う、講談ならではの魅力とは何なのでしょう。

「一に俗談平話を説き、二に座興の笑いを結び、三に猛勇の智弁を揮う。つまり今日的な話をして、笑わせて、張り扇(はりおうぎ)を叩きながら、立て板に水の如く弁舌を揮う痛快感。これが講談の本質ですね。昔、なぜ、凋落の一途を辿っている講談をやるんだと言われたことがあったけれども、確かに講談というのは今時ではないんだな。長くて、堅くて、ユーモアに欠けていて、テーマも仁義、忠孝、礼儀でしょう。でも、好きだからしょうがない。三島由紀夫曰く、あらゆるもので年代とともに光ってくるのは芸であると。余分がそぎ落とされ、体力の衰えとともに光を放つものは芸以外にないという、この言葉を私は金科玉条にしています」

名将の言葉を現代にうつした著書も多い。師匠の好きな武将は武田信玄。
「残念ながら、今川義元を好きになれと言われても無理ですよ」(笑)

## 名将の言葉の運び屋。

――ところで〝講談師、見てきたような嘘をつき〟という言葉がありますが、師匠は実際にその土地を訪ねて、その目で史実の裏側を確かめられることも多いそうですね。

「講談は演芸、芸能ですから、事実をしゃべっているわけじゃない。見てきたような、罪のない嘘をつくわけです。でも、自分でもいろいろ調べる。それは先代の師匠の教えでもありましてね。今までは〝見てきたような嘘をつき〟だったけれども、今は〝見てきたうえで嘘をつき〟だと。同じ嘘でも真に迫った嘘がつける。リアリティのあるい話ができるというわけですよ。これは司馬遼太郎さんが言っているんだけれどね。関ヶ原に行って赤土と松と松籟から、慶長五年の天下分け目

**【たからいばきん】**
講談師。静岡県立清水東高校を卒業後、明治大学文学部英米学科入学。1959年の卒業と同時に五代目宝井馬琴に正式入門。前座名・琴調（きんちょう）として初高座。'66年真打ち昇進、琴鶴（きんかく）となる。'87年六代目馬琴を襲名。話し方教室の講師や司会の他、ビジネス向けの講談でも活躍。'76年、'84年に芸術祭優秀賞、'79年放送演芸大賞講談部門賞、'88年浅草演芸大賞奨励賞、'91年芸術祭賞、'98年文化庁芸術選奨文部大臣賞、'99年紫綬褒章受章。著書に『馬琴の東海道中記』『埼玉英傑伝』『いま甦る名将のひとこと』『名将ちょっといい言葉』『講釈師見てきたような…』『講釈師足で綴る戦国ドラマの旅』『道は講釈に通ず』『社長～革新50の心得』がある。現在、講談協会会長。'35年静岡県静岡市（旧清水市）生まれ。

昔は、大学で先生に学ぶ代わりに、寄席で講談師から通俗歴史を学んだ。「だから、講談を聞くとためになる。落語を聞くとダメになるってね」（笑）

の戦に思いを馳せて、鎧兜の触れ合う音や雄叫びを感じる人とそうでない人とでは、月と六ペンスもの差があると。感受性も芸才。努力してでも感じられるようでないとね」

――英語講談、実験講談など、さまざまなスタイルに取り組んでいらっしゃいますが、とくに戦国武将に学ぶビジネス講談などは、経営者の方々に人気とうかがっています。

「山内一豊の生き方などを見ますとね。強い奴が生き残るのではない。頭がいい奴が生き残るのでもない。ただ一つ機に臨み、変に応じられる臨機応変が生き残るのであると。これはダーウィンの進化論『種の起原』と同じですよ。強い加藤清正も、石田三成も、良い結末は迎えていない。結局、風見鶏をやってきた者が生き残っている。私が、武田信玄が好きというのも、人は少し鈍なる者を仕入れたるがよしというところでね。ただし、問題は〝少し〟ということ。〝オール・鈍〟じゃないよ。〝ア・リトル・鈍〟ね。(笑) 名人名工はやや鈍い刀を使うけれども、これと同じです。身体に自信があり過ぎる、知略に酔い過ぎる、女房の言うことを聞かない奴は、最後には潰れちまう。そういう名将言行録から学んだ真理をわかりやすく話すわけですね。クロネコヤマトじゃないけれど、言葉の宅急便。名将の言葉の運び屋ですよ」

――山内一豊の名場面は、この秋、グランシップで開催の『家族でたのしむ講談教室』の題材にもなるとのことで楽しみにしてらっしゃる方も多いと思います。

「大河ドラマのおかげで、今年はどこに行っても『一豊』だね。英語講談でも『一豊』をやったけれども、でも、やっぱり本家にはかなわない。たとえば千代が一豊の帰りを出迎える場面、〝お帰りなさいませ〟が〝ウェルカム・ホーム〟じゃあね。(笑) 〝花も盛りの弥生の半ば…〟と言って、ピシッと張り扇を叩けば、それだけで客は天正二年に引き戻される。そこが長年の重み、本物の力だな。そうした講談の魅力の一端でも感じてもらえればうれしいですね。グランシップでは毎回おなじみの言葉の体操、あれを今年もやりますよ。『東海道往来』の中から、箱根から白須賀までの宿をしりとりで詠んでいくという、いわゆる連ね言葉。〝箱根を超えて伊豆の海〟、〝三島の里の神垣や〟、〝宿の～〟という具合に文字が鎖のようになっているから〝文字鎖〟というんだけど、これをやると口の回転が良くなるというので、講談の稽古ではよくやります。それから声に出して読むということね。同じ本を読むにしても、目で追っているだけでは身体に入ってこない。ところが声に出して読むと途端に身体に沁み入ってくる。やっぱり日本語を蘇生、再生させるためにも、講談というのはつくづく有意義な芸だなと思いますね」 G

**11/5(日)** 入場無料／要事前申込

**宝井馬琴の**

# 家族でたのしむ講談教室

**13:30開場　14:00開演**

**グランシップ 11階会議ホール・風**

※抽選で小・中学生に張り扇(はおうぎ)プレゼント。

参加申込／P25参照